



▲上 2点：特選和傘  
▼右側4点：(上段)和傘 羽二重 (左下)舞傘 花満 (右下)和傘 中入

番傘：竹と和紙の素材を生かし、既業中にも特異な趣意を持つ和傘の和傘。番傘より細身で軽く、色鮮やかで、ホカホカが美しい。現在では舞臺の傘も「和傘」と呼ぶ。  
羽二重：和紙に薄紙を重ねた羽二重生地を使った和傘の最高級品。つややかな美しさと丈夫さを兼ね備えている。



「古道具-KOTCURI」2007グッドデザイン中小企業庁長官特別賞受賞。プロデューサー：古道具 西条麻太郎 / ディレクター：クリップ 島田朝彦 / デザイナー：東京デザインパートナー 長塚真。和傘のように放物状に広がる竹骨の構造と手置き和紙を通る柔らかな光が特徴。シェードは、季節やインテリアなどに合わせて替えることができる。

ど雨具全般を販売し、店舗の一角で和傘を扱うもの、一般需要はほとんどない状態で、職人の高齢化も進んでいた。「先のない業界だと、先代をはじめ皆に反対されました。それでも、「和傘の可能性に賭けよう」と決断したのは、「若い自分がいいと思うのだから、和傘の魅力がわかる人は他にもいるはず」と考えてのこと。世代交代に備え、修業を積む一方で、いち早くインターネットを導入し、潜在需要の掘り起こしに力を入れた。それが功を奏したのは、ネット需要が伸びはじめると、来店客も目に見えて増え、高校生にまで客層が広がった。百貨店の催事やイベントで各地へ出向くことも多くなり、ネット需要に牽引され、実店舗売上げの伸びも勢いを増してきた。

和傘はすべて「手作業でつくる。一本の竹を数十本に割り、その竹骨を順番通り、機織りという木製部品に糸でつなぎ、骨組ができる。その上に和紙を張り、厚紙に油を引き、天日で干して仕上げる。天然素材ばかりを使うので、場所や微妙な調整が必要になる。職人の腕に頼るところも多い。それが和傘の魅力につながっているという。熟練の技から生まれる和傘は、竹骨が一本の竹のように寄り添い、開けば場の空気を飲み込むほどの存在感を持つ。

日本の情緒を伝えるには好適なのか、海外向けギフトとしても人気がある。大手企業や国際会議の主催者が選ぶのは、2、3万円の番傘や蛇の日傘。和日傘なら、型染友禅で企業ロゴを入れた傘袋を添えることもできる。伝統の技を生かしながら、新技術を用いて張り地を加工処理するなど、実用性、耐久性を高める工夫を重ねてきた。それがまた、新たな事業展開につながっている。

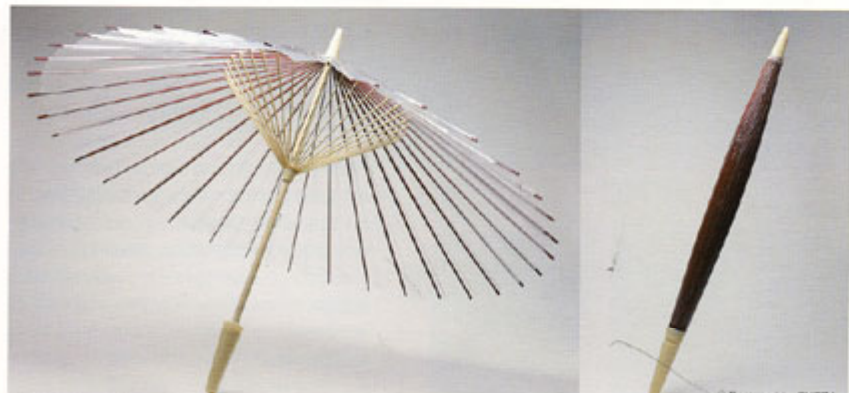
「安値で、軽量で、耐久性がある洋傘には、実用面では太刀打ちできないものの、和傘には使っではじめてわかる味わいがあります。日傘には和傘を愛用し、折に触れ、日常に生かす提案をしてきた。開いたときの手触り、ほのかに香る油の香り、手に伝わる雨音、ジーンズに垂れる、舞傘や和日傘を日除けにと、「さもない和傘」という固定観念にとらわれない楽しみ方が広がっています。

## 新しい時代のギフトアイテム考⑨ 「和傘」



日吉屋 五代目 西条麻太郎氏

# 「伝統は革新の連続」 和傘の可能性を拓く



「SINAFU」 - 和傘は20年ぶりにモデルチェンジした -  
デザイン：クルソ 藤村康典 + 佐藤麻代 / 製作協力：日吉屋、竹は竹にMR 漆塗(高純度)に精製した天然漆で、耐久性、耐水性に優れる。張り地はPP/EVA/PPの3層構造フィルム(非発熱系素材)。柄と取手は竹製素材。糊(ろくろ)は和紙製。日本ならではの竹文化に着目し、竹の魅力をもう一度、現代に発信する「SINAFU」の取り組みは、コンテンツラリー・インテリアデザインの国際見本市「100%Design Tokyo」(10/31 - 11/4 明治神宮外苑)で発表された。SINAFUの詳細 <http://www.sinafu.jp/>

取材協力 株式会社日吉屋  
東京都中央区寺之内通御膳町1番4号 5F  
TEL 075-441-6044  
<http://www.wagasa.com>

和傘の原型は古代に中国から伝来し、貴族階級が日除け、慶賀に用いたとされている。両傘として庶民の間に普及するのは江戸時代のこと。明治以降は、生活必需品の座を洋傘に譲ることになり、市場は縮小する一方、最盛期の明治初期には、京都に約200軒あった和傘の製造元は、今では1軒のみ、国内でも十数軒になった。

京和傘の老舗「日吉屋」の創業は江戸後期。京都市上京区、「玉袋」門前に店を構え、番傘、蛇の日傘、舞傘などを製造・販売するほか、茶道、茶室、茶室用の本式舞傘や、各種祭礼、伝統行事に用いる傘の製作・修理を担っている。

その日吉屋も四代目で廃業を考えていた。それを救ったのが「株式会社日吉屋」代表取締役の西条麻太郎氏(33)だ。2004年には五代目として継承し、和傘の魅力を伝えるとともに、「伝統は革新の連続」を理念に、和傘が現代に生きる可能性を追求し続けている。

**インターネットで  
和傘の潜在需要を引き出す**

「竹の骨組みの幾何学的な構造や、和紙を透過する光が本当にきれいで、手づくりならではの存在感がありました。和傘に魅せられた西条氏は、「和傘が廃れてしまっているのは忍びない」という思いから、公務員を辞めて、職人の道に入った。10年ほど前、妻・純子氏(現専務取締役)の実家である日吉屋で和傘を手にしたのがきっかけだった。当時は、洋傘やビニール傘、レインコートな